

0 150 cm 10 20

SEKISUI JUSHI

海
迎
秋
文

549
力
60/34



肥後國景宗久の温泉小豆阿比志
此にといきくあき〜天明二の
年秋八月廿二日夜の時をるふ
江都を方かゆり地よりふのさ
風少〜吹きぬと云ひ〜
足利川の原原休しげ〜
の何葉福田程権と初〜
乃男女相多者〜
古の〜
遠舟居〜
氣〜
經冊を付〜

遠衣を〜

廿日

あつたつちのうらなひをよめる
中ふらちのうらなひをよめる
のうらなひ

城のありては中ふらちのうらなひ
里のうらなひは城のありては中ふらち
松のうらなひをよめる

山のありては中ふらちのうらなひ
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる

城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる

廿六日

城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる
城のありては中ふらちのうらなひ
をよめる

先三浦明平はかういふ詩を出してさうの
うれぬと嘆いふかきふくは川への
河原のふくみ物とて後には清く
とんとりて
とんとりて

毎日のことこれとて思ふは
ちかふとてさういふ詩をうたへ
あはれき系の驛のゆくかたの

廿七日

卯ふあはれき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの

卯ふあはれき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
卯ふあはれき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの

廿八日

卯ふあはれき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの
ふかき系の驛のゆくかたの

ふれんくしの草の御ためて有
幸なる御礼に

旅人の御礼に
乃より御書の内容より大井川に
なむと云ひし御書と云ふも
えと云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも
大さゆかぬ御書と云ふも
あつ書と云ふ御書と云ふも

廿九日

辰刻申す御書に云ふ御書の中
ち御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも

我も美が命に云ひし御書に
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも

晦日

卯刻申す御書に云ふ御書の中
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも
御書に云ひし御書と云ふも

八月廿一日

昔々おんくらの野の波と静かに
おとくつらふ舟の追はる美事
少婦の面うつるもよみ路白浪の
九月朔日

卯小島路舎のひたる志屋の観音
をよみおんくらの舟と静かに
おとくつらふ舟の追はる美事
少婦の面うつるもよみ路白浪の
九月朔日

二日

卯小島とせき松りくとあしはつに
しむるもよみおんくらの舟と静かに
おとくつらふ舟の追はる美事
少婦の面うつるもよみ路白浪の
九月朔日

自他の観音八徳のり板好む
教句のおんくらの舟と静かに
おとくつらふ舟の追はる美事
少婦の面うつるもよみ路白浪の
九月朔日

卯小島とせき松りくとあしはつに
しむるもよみおんくらの舟と静かに
おとくつらふ舟の追はる美事
少婦の面うつるもよみ路白浪の
九月朔日

三日

卯小島とせき松りくとあしはつに
しむるもよみおんくらの舟と静かに
おとくつらふ舟の追はる美事
少婦の面うつるもよみ路白浪の
九月朔日

といふ傲のふあれば人柄素はよ
 松洞のふれをみおしあうてはれ
 こころいひ着小海りあをまよと
 付くまほふふ山三條流ておれ
 弟りて相續す白秋も自の流を
 陰之傳りてさうさういしは来この
 来りて對福をく候そのに初旅乃
 づりてさうさういしは来この
 うさうさういしは来この
 四日

幸ふと外ふとあはれもさうさう
 くれおのよふいしは来この
 来りてさうさういしは来この

まいにいひしは来この
 乃書りふえお替り休いしは来
 乙薬師とてさうさういしは来
 四日さうさういしは来この
 於麻山とてさうさういしは来
 四日さうさういしは来この

且日
 幸ふと外ふとあはれもさうさう
 こころいひ着小海りあをまよと
 付くまほふふ山三條流ておれ
 弟りて相續す白秋も自の流を
 陰之傳りてさうさういしは来この
 来りて對福をく候そのに初旅乃
 づりてさうさういしは来この
 うさうさういしは来この

風潮のつらげと伴ひひ
ききとめしめるのむねえけり
いしうしあま湖といふ事
あはれよふやうとてさう湖
といふ事いふやうといふ事
の東より西といふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事

わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ

いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事

八日

いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事
いしうとめしめるつらげ
わが事つらげといふ事

らねるは伏見殿かまんとすまはる
胡山京隆より娘のふとぬき空湯
ありそよ葉のふとぬき二十字
の御前とすまはる御下

空湯ありこの里おし葉花と

~~~~~

景隆

あまの世も海にふれ木の  
娘の里より表人のふとぬき

又

娘の娘もあまのふとぬき  
あまの里より表人のふとぬき

九ノ川河敷書と祝言と

あまの娘のふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき

あまのふとぬきのあまのふとぬき







東明地追風のれ美帆ふきて  
いふくんとく波崎も月ち  
くくも海京之りりちのまも  
あせほしつを力を神く坊次子  
と本屋くいつくあやあの子の候  
のすれのきくさえもつれす潔と  
ましくあつらん地地と敷六月と  
ふくぬれはあつりあゆく

十六日

明と波京の目さくつれこのり  
り波京もつりつらんあつれ  
別の程帆くつるあつるぬも  
かくちあめてつりつれ速き此  
備前半京くつる皆くあつる

あつれつれつらんあつれつれ  
のあつれつれつらんあつれつれ  
波れつれつらんあつれつれ  
つれつれつらんあつれつれ  
よとつれつらんあつれつれ  
つれつれつらんあつれつれ  
十七日

以取のつれつらんあつれつれ  
のあつれつれつらんあつれつれ  
あつれつれつらんあつれつれ  
あつれつれつらんあつれつれ  
あつれつれつらんあつれつれ  
あつれつれつらんあつれつれ  
あつれつれつらんあつれつれ





四神志々々々々々々々々々々々  
 字の末々々々々々々々々々々々  
 々々々々々々々々々々々々々々々々  
 乃山々々々々々々々々々々々々  
 素之銘々々々々々々々々々々々  
 多者初の家々々々々々々々々々  
 田も善哉々々々々々々々々々々々  
 有るん々々々々々々々々々々々々  
 之々々々々々々々々々々々々々々  
 之々々々々々々々々々々々々々々  
 著飛丸のののののののののの  
 流不風麟丸のののののののの

廿一日

字の末々々々々々々々々々々々  
 有るん々々々々々々々々々々々々  
 之々々々々々々々々々々々々々々

廿一日

字の末々々々々々々々々々々々  
 有るん々々々々々々々々々々々々  
 之々々々々々々々々々々々々々々

廿二日

字の末々々々々々々々々々々々  
 有るん々々々々々々々々々々々々  
 之々々々々々々々々々々々々々々  
 海魚のののののののののの  
 之々々々々々々々々々々々々々々  
 之々々々々々々々々々々々々々々  
 之々々々々々々々々々々々々々々

うらやまの情を麻の着せらるる  
に  
あはれ

廿三日

花のよき香の清き花の香の遊  
て上りて来りては亦て花の可成り  
之の清き香も花の清き香も  
清き香も花の清き香も花の清き香も  
を免るる花も亦て花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
又上りて来りては亦て花の可成り

花のよき香の清き花の香の遊  
て上りて来りては亦て花の可成り  
之の清き香も花の清き香も  
清き香も花の清き香も花の清き香も  
を免るる花も亦て花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
又上りて来りては亦て花の可成り

廿四日

申す別れの上りて来りては亦て花の可成り  
波も志の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
又上りて来りては亦て花の可成り  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も  
花の清き香も花の清き香も花の清き香も

海に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに

廿五日

舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに

舟の舟に舟を乗せしむるに

舟の舟に舟を乗せしむるに

廿六日

舟の舟に舟を乗せしむるに

廿七日

舟の舟に舟を乗せしむるに

廿八日

舟の舟に舟を乗せしむるに

廿九日

舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに  
舟の舟に舟を乗せしむるに

舟の舟に舟を乗せしむるに

月がのこりていふもよきとていふもよき  
をいふもよきとていふもよきとていふもよき  
白くもよきとていふもよきとていふもよき  
はなれりていふもよき

いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき

十月朔日

いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき

二日

別々の物とていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき

いふもよきとていふもよきとていふもよき

いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき  
いふもよきとていふもよきとていふもよき

ついでに

三日

道もあらたなれば辰小まなびや  
まは出ると東まはつるわ里乃  
松の林とありく竹橋のりまの  
あつるころとあつるころの  
取つふらふと松をふちて先と  
すりぬき田口く体と申す時斗  
小徳を乃河籠より久

九州大學圖書印



二一四